

私の履歴書

前橋 汀子

①9

日本に帰ってくる時は近いうちにレニングラードに戻って勉強しようと考えていた。ところが私の人生は思わぬ方向へ進み始める。

帰国の翌年、1965年夏のことだ。栃木県の日光金谷ホテルで、ジュリアード弦楽四重奏団の講習会が開かれることになった。戦後、米ニューヨークのジュリアード音楽院の教授陣が結成したグループだ。ベルクやシェーンベルクなどの現代音楽を積極的に取り上げ、極めて高いレベルで演奏していた。

現代音楽沸き立つ心

自由で活気に満ちた街

このときシェーンベルクの三重奏のレッスンをしてくださったのが、ジュリアード弦楽四重奏団の第1バイオリン、ロバート・マン先生だ。情熱的な指導とシェーンベルクの音楽に対する造詣と愛情の深さに、私はすっかり魅了されてしまった。

今回の写真でマン先生と私の間に写っているのは通訳の方だが、実は若き日の村上さ

ん。科学史家で東京大学名誉教授の村上陽一郎さんだ。当時は東大の大学院生だったと思う。チェロを弾かれる方だから、先生の専門的な指示も適切に訳されていた。

「ジュリアード音楽院に留学したい」。私は都心のホテルに滞在していたマン先生を訪ね、つたない英語で留学への思いを打ち明けた。「僕が

モノがあふれていた。「こんなにおいしいものがあるのかしら」と思いながら、安いビザを毎日張り、爽やかなコーラを喉に流し込んだ。見るものすべてが珍しく、生活は活気に満ちていた。

モノがあふれていた。「こんなにおいしいものがあるのかしら」と思いながら、安いビザを毎日張り、爽やかなコーラを喉に流し込んだ。見るものすべてが珍しく、生活は活気に満ちていた。

私が見たのはジュリアードのディプロマコース。バイオリンの実技はドロシー・デイレイという女性の先生から個人指導を受けた。後に五嶋みどりさんをはじめ、先生の



左から筆者、村上陽一郎さん、マン先生

下から多くのバイオリニストが育つのだが、私は日本人初の弟子になったわけだ。先生にはよくご自宅に泊めていただいた。自ら運転して送り迎えまでしてくださったのだ。

マン先生のクラスでは学生でカルテットを組み、弦楽四重奏の指導を受けた。私はソロ演奏のことばかり考え、弦楽四重奏などの室内楽に正面から向き合えなかった。その重要性に気づくのはずっと後のことだ。マン先生が直々に教えてくださる貴重な機会だったのに、もったいないことをした。(バイオリニスト)